

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：62608

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12287

研究課題名(和文) 木下順庵の漢詩における盛唐詩受容の研究

研究課題名(英文) The Reception of High Tang Poetry in Sinitic Poems by Kinoshita Jun'an

研究代表者

山本 嘉孝 (Yamamoto, Yoshitaka)

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：40783626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の日本漢詩の特色の一つとして挙げられるのは、特に18世紀、盛唐詩の模倣が重要視された点である。従来の研究では、荻生徂徠が注目されがちであったが、本研究では、徂徠よりも早く盛唐詩の模倣を重視した儒者である木下順庵に光を当て、順庵が『朱子語類』論文下に見られる盛唐詩模倣を重視する姿勢を受容した可能性を示し、その背景に、林家の儒者への対抗意識、および盛唐詩を高く評価した朝鮮通信使から受けた影響が存在していたことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、当初、盛唐詩を模倣することは、海外にも通用する優れた漢詩制作を行い、優れた儒者としての地位を日本内部で確立するために役立つ技法であったことが明らかになった。木下順庵やその門人たちは、盛唐詩を模倣し、経世済民に関与できる地位を確立しようとしたといえよう。本研究により、江戸時代の日本で、儒者たちが戦略的に自身の地位を向上させ、積極的に社会に関与しようとした姿勢が鮮明になった。江戸時代の漢詩制作に、社会や政治経済に影響のある側面が存在していたことを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：One of the most salient characteristics of Sinitic poems by Edo-period Japanese authors, particularly those of the eighteenth century, is the value placed on the imitation of High Tang poetry. While previous scholarship tended to focus solely on Ogyu Sorai, this project shed light on Kinoshita Jun'an, who preceded Sorai in extolling High Tang poetry. Jun'an likely found inspiration in the Zhuzi yulei, and sought to compose Sinitic poems that were superior in quality to those by the leading Confucian scholars of the Rinke (Hayashi house). Jun'an was likely also influenced by Korean scholars of the Choson embassy, who regarded High Tang poetry as worthy of emulation.

研究分野：日本漢文学

キーワード：漢詩 江戸時代 日本漢文学 盛唐詩 木下順庵 木門

1. 研究開始当初の背景

(1) 江戸時代における盛唐詩模倣の源流

盛唐詩の模倣は、日本漢文学史のなかで、江戸時代の漢詩制作に特有の現象であるといえる。盛唐詩の模倣が広がりを見せたからこそ、漢詩制作は一つの技芸として一般の人々にまで浸透し、また盛唐詩の模倣に対する反動が大きくなうねりを見せたために、江戸時代後半の漢詩制作は更に多様化し、洗練され、明治維新後も隆盛を極めた。

しかし、江戸時代の日本で、盛唐詩の模倣がどのように開始されたかについては、従来の研究では十分に明らかにされていなかった。荻生徂徠(1666~1728)が盛唐詩模倣の祖であるかのように捉えられることも少なくないが、実のところ、徂徠自身、日本で「唐詩」(特に盛唐詩を指すと考えられる)が尊重されることの端緒を開いたのは、木下順庵(1621~1699)であったとの見解を書き残している(荻生徂徠「叙江若水詩」、『徂徠集』巻八)。

そこで、本研究では、江戸時代における盛唐詩模倣の源流について解明すべく、木下順庵に焦点を絞り、どのような背景のもとで、盛唐詩の模倣が日本において開始されたのかについて調査することとした。

(2) 木下順庵の再評価、および日本漢文学史の再考

前述の荻生徂徠に比べて、木下順庵は、日本漢文学研究のなかで十分に調査されてきていない。徂徠のその門下が、書物の出版等を通して江戸時代中期日本の社会全体に大きな影響を与えたことは確かであるが、徂徠門下とその影響下で行われた、盛唐詩の模倣を基礎とした漢詩制作は、木下順庵門下において先に行われていたのであり、徂徠やその門下が木下順庵門下から影響を受けた可能性も排除できない。

したがって、本研究では、木下順庵の足跡を再評価し、江戸時代前期~中期の漢詩制作のあり方を総合的・多角的に俯瞰することで、日本漢文学史そのものを再考することとした。

2. 研究の目的

(1) 盛唐詩受容の初期段階の解明

本研究の最大の目的は、江戸時代の日本において盛唐詩の受容と模倣が始まった初期段階について、特に木下順庵に焦点を絞って、その様相を明らかにすることにあつた。いかなる経緯のもとで、盛唐詩を模倣することに価値が見出されるようになったのかを解明することで、盛唐詩が江戸時代の日本社会のなかでどのような意味を持ったか、また漢詩制作における模倣がどのような技法であったかをよりよく理解することができるようになり、日本の歴史と文化のなかで漢詩がいかなる役割を果たしたのか、という問題の一端を探ることが可能となることが期待された。

(2) 日本漢詩文研究の枠組みの再検討

吉川幸次郎氏や杉下元明氏による木下順庵門下研究をふまえながら、従来、荻生徂徠を中心に記述されてきた江戸時代における盛唐詩受容史について再検討を加えることで、日本漢詩文研究の枠組みそのものを再考することも、本研究の重要な目的であった。徂徠門下以外の儒者集団も検討することによって、江戸時代の日本における漢詩文制作の実態がより鮮明に見えるようになり、どのような視点や問いに基づいて日本漢詩文を研究すべきか、という問題について、新たな知見が開かれることが期待された。

3. 研究の方法

(1) 詩語の分析

漢詩は、先行する漢詩文で用いられた字句やイメージを再利用しながら制作される。本研究では、木下順庵が用いた詩語がどのような盛唐詩に基づくかを調査し、同時に、盛唐詩以外の漢詩もどの程度ふまえられているかを調査した。

また、木下順庵による盛唐詩の尊重は、順庵一人が単独で行ったというよりも、自身の門人たちとともに集団で行ったものであったため、本研究では、木下順庵門下の特に室鳩巢と新井白石の漢詩にも範囲を広げて、詩語の分析を行った。

(2) 人物交流の調査

漢詩は、多くの場合、具体的な社会的な場面において作られるものであり、具体的な人物のために作られるものも少なくない。したがって本研究では、木下順庵がどのような人物たちと交流したのかについて、漢詩・漢文だけでなく、日記、筆談、書簡などの資料を用いて調査した。

特に、木下順庵が漢詩について対話・議論したことが確認できる人物たちについて探り、同時代の日本における学界・漢詩文壇のなかにおける木下順庵の位置づけを把握できるように心がけた。

4. 研究成果

(1) 朱子学と盛唐詩

木下順庵、およびその門下の漢詩に用いられる詩語を分析するなかで明らかになったのは、李白・杜甫などを筆頭とする盛唐詩人だけでなく、六朝の陶淵明や、北宋の蘇軾も模倣されていた点である。陶淵明・李白・杜甫・蘇軾の詩は、南宋の朱熹の発言を集めた『朱子語類』論文下で、漢詩制作の学習者が模倣すべき対象として言及されている。木下順庵が盛唐詩模倣の拠り所としたのは、『朱子語類』の記述であった可能性が指摘できる。

従来の研究では、江戸時代の日本における盛唐詩模倣が、朱熹の学説(いわゆる朱子学)に対して激しく反論した荻生徂徠によって取り組まれたことが強調されてきたため、朱子学と盛唐詩は相反するかのよう誤った認識が広がっていた。他方、本研究では、木下順庵とその門下の盛唐詩受容を検討した結果、朱子学と盛唐詩は相反しないだけでなく、むしろ朱子学を重要な媒介として盛唐詩の模倣が開始された可能性が示された。

以上の研究成果は、論文「室鳩巢の和陶詩 模倣的作詩における宋詩の影響」で発表し、著書の『詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀』の書き下ろし部分に記した。また、「文粹もの」における朱子学と陽明学の折衷」や「江戸時代の漢詩文と感染症」を執筆するためにも活用した。

(2) 「擬古」の系譜

本研究では、木下順庵による盛唐詩模倣が、「擬古」すなわち古代の詩文を模倣する漢詩文制作の技法のなかでどのように位置づけられるかについても考察した。前述したように、模倣の対象は必ずしも盛唐詩だけでなく、陶淵明や蘇軾らによる六朝詩・宋詩にまで広がっていた。ここから窺えるのは、六朝・盛唐・北宋の各時代において最高峰とされた詩人を模倣しようとする順庵とその門人たちの姿勢であり、本研究では、特に和習を遠ざける意識について注目した。同時に、「擬古」が単に語句の模倣にとどまらず、古代の詩人たちの生き方をも模倣・思慕するものであったことも明らかにした。

以上の研究成果は、論文「室鳩巢の和陶詩 模倣的作詩における宋詩の影響」、「室鳩巢の擬古詩 模倣・虚構・寓意」で発表したほか、著書『詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀』にも記した。また、盛唐詩模倣とは異なるが類似する「擬古」の一例として、木下順庵の孫弟子に当たる中村蘭林による和歌受容を取り上げ、漢学に疎い武士たちに平安朝の和歌を読ませることによって、平安朝の公家たちの生き方を模倣・思慕させようと企図したことを明らかにし、論文「中村蘭林と和歌 学問吟味の提言と平安朝の讃仰」で発表した。

(3) 儒者たちの競合

本研究で明らかにした人物関係の際たるものは、木下順庵と林鷺峰・鳳岡父子の交流である。林鷺峰・鳳岡は、徳川家に代々仕えた儒者の家、林家の頭首として、江戸時代前中期の儒学・漢詩文を領導した。しかし、木下順庵やその門人たちのように、世襲ではなく個人の才能によって名を揚げた儒者たちは、林家を尊敬しつつも、対抗意識を持ち、木下順庵とその門人たちの場合は、事実、林家を押しよける形で幕府儒臣に抜擢された。このような儒者同士の競合の過程において、林家では模倣されていなかった盛唐詩を模倣することにより、木下順庵とその門人らは、自らの立場を高めようとした可能性が指摘できる。以上の研究成果は、論文「木下順庵と林家」で発表した。

(4) 朝鮮通信使からの影響

前項で指摘したように、盛唐詩の模倣は、林家と木下順庵門下との競合のなかで意味を持ち得たと考えられる。木下順庵が、優れた漢詩制作の方法として盛唐詩の模倣を見做し、またそれが林家を含む同時代日本の他の儒者たちとの対抗手段となり得るものであったことの傍証として、木下順庵が、朝鮮通信使との筆談のなかで、「盛唐」の詩に言及し、盛唐詩が最上の漢詩であるとの認識を朝鮮通信使と共有している点が指摘できる。同時代の日本の儒者と朝鮮通信使たちとの筆談や漢詩文の応酬を通覧すると、朝鮮通信使たちが盛唐詩の模倣を優れた漢詩制作の方法として見做していたことが分かる。したがって、木下順庵が盛唐詩模倣に価値を見出した理由の一つとして、海外にも通用する漢詩を制作しようとしたことが挙げられる。この研究成果については、本研究の研究期間中に論文として発表することはできなかったが、現在、論文文化を進めているところである。

(5) 経世済民との関連

盛唐詩を模倣することは、海外にも通用する優れた漢詩制作を行い、優れた儒者としての地位を日本内部で確立するために役立ったと考えられる。儒者は経世済民を本領とし、漢詩制作は余暇の営為だが、木下順庵やその門人たちは、盛唐詩を模倣し、優れた漢詩制作を行うことにより、儒者としての立場を向上させることで、経世済民に關与できる地位を確立しようとしたといえよう。この研究成果については、著書『詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀』で記したほか、論文「目安箱と韓愈 室鳩巢における唐宋古文・朱子学・経世の連関」の執筆にも活用した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 近世日本における『蒙求』の音声化 漢字音と連続性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Edoardo GERLINI・河野貴美子（編）『古典は遺産か？ 日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 143-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 近世日本における漢文作文と唐宋八大家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東英寿（編著）『唐宋八大家研究』（中国書店）	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 近世日本における蘇轍「上枢密韓太尉書」受容 室鳩巢と頼山陽を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東英寿（編著）『唐宋八大家研究』（中国書店）	6. 最初と最後の頁 293-313
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 柴野栗山と近衛経熙	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 飯倉洋一（編）『近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の場 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 35
2. 論文標題 木下順庵と林家	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北陸古典研究	6. 最初と最後の頁 42 - 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 江戸時代の漢詩文と感染症	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロバート キャンベル (編著) 『日本古典と感染症』 (KADOKAWA)	6. 最初と最後の頁 154 - 176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 目安箱と韓愈 室鳩巢における唐宋古文・朱子学・経世の連関	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東英寿 (編著) 『唐宋八大家の探究』 (花書院)	6. 最初と最後の頁 21 - 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 「文粹もの」における朱子学と陽明学の折衷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鈴木健一編 『明治の教養 変容する 和 漢 洋 』 (勉誠出版)	6. 最初と最後の頁 154-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 中村蘭林と和歌 学問吟味の提言と平安朝の讃仰	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇 朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 209-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 33
2. 論文標題 室鳩巢の擬古詩 模倣・虚構・寓意	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北陸古典研究	6. 最初と最後の頁 22 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本嘉孝	4. 巻 -
2. 論文標題 室鳩巢の和陶詩 模倣的作詩における宋詩の影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 滝川幸司・中本大・福島理子・合山林太郎編『アジア遊学 文化装置としての日本漢文学』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 69 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 3件／うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Early Edo Antiquarianism: Hayashi Gaho's Imitation of Heian Court kanshi
3. 学会等名 EAJS Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 近世日本における蘇轍「上枢密韓太尉書」受容 室鳩巢と頼山陽を中心に
3. 学会等名 日本宋代文學學會第八回大會・第六回唐宋八大家シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Pen Pals in Crime: Literary Sinitic Letter Writing in Tokugawa Japan
3. 学会等名 Yale University CEAS Colloquium Series (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 NCC 2.0: Envisioning the 4th Decade
3. 学会等名 The North American Coordinating Council on Japanese Library Resources 30th Anniversary and Fourth Decade (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 江戸時代の漢文隨筆に見られる天文学の知識
3. 学会等名 I-URICフロンティアコロキウムとROIS/I-URIC若手+ベテラン異分野クロストークとの合同シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 『蒙求』と音声
3. 学会等名 オンラインワークショップ「テキスト遺産の利用と再創造：日本古典文学における所有性、作者性、真正性」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 The Sinitic Seuil: Classical Chinese Prefaces in Japanese Books
3. 学会等名 MLA 2021 (Modern Language Association) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 葛飾北斎画『絵本孝経』挿絵における和漢人物の表象
3. 学会等名 「中近世日本の画題生成における明代出版文化の受容と展開に関する総合的研究」第3回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 近世初期における平安朝漢詩の思慕 『擬内宴詩集』と擬古
3. 学会等名 「在米日本古典籍（リチャードレインコレクション）の調査研究と教育活用に関する研究」オンライン国際共同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 漢詩と名所 アンソロジー『日本名勝詩選』（1785序刊）を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「古典のジャンルと名所：デジタル文学地図の活用」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 The Afterlife of Chinese Classics: How “Shi” Became “Poetry” in Modern Japan
3. 学会等名 2021 Association for Asian Studies (AAS) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Poetic Inscriptions as Contemporary Art Criticism: “[Female Performer Playing the Shamisen]” by Yamaguchi Soken and Minagawa Kien
3. 学会等名 Creative Collaboration: Kyoto-Osaka Pictorial Arts and Salon Culture, 1750-1900 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Kamigata Literati Meetings in Illustrated Gazetteers and Poetry Collections
3. 学会等名 Mapping Collaborations and Networks in Kyoto-Osaka Cultural Production and Digital Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Judging a Poem by Its Title: The Exophonic Significance of Poem Titles in Japanese Sinitic Poetry
3. 学会等名 World Literatures and the Global South Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 The Rhetoric of Cultural Revival in Seventeenth-Century Japanese Confucianism
3. 学会等名 EAJS Japan Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 「修辞」のゆくえ 英訳と漢文脈
3. 学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Paper and Threads: My Encounter with Early Modern Japanese Books
3. 学会等名 JSPS外国人特別研究員サマー・プログラム2018 (総合研究大学院大学) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshitaka Yamamoto
2. 発表標題 Transcultural Dimensions of Edo Japan: Flower Arrangement and Tea Ceremony
3. 学会等名 Workshop: Transcultural Dimensions of Edo Japan (Heidelberg University) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 蕙齋・北齋の『絵本孝経』挿絵について
3. 学会等名 第14回北齋序文を読む研究会 (立命館大学・大英博物館) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本嘉孝
2. 発表標題 光格天皇歌壇と漢詩 天明三年九月十三日当座詩歌会を中心に
3. 学会等名 科研基盤研究B「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の場」公開研究会 (大阪大学)
4. 発表年 2018年～2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山本嘉孝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 440
3. 書名 詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------